

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 120 号
2022年 4月



第 180 回観察会・横向(鬼面山西山麓)ブナ林観察会

吹雪も体験 2月の観察会 野中文子

今回は寒い季節に15名もの参加者。みなさん観察会を心待ちにしていたんですね。青空のもと笑顔で出発しました。横向スキー場のホテルでトイレを借り、駐車場に車を止めさせてもらって(ホテルの方、神対応)そこからスノーシューです。初めて履く方もいってちょっとドキドキのようでした。ブナの森へ踏み入りマス。やや湿気を含んだ雪は10～15センチほど沈むけど、スキー数名を先頭にみなでトレースを付け、問題なく進みました。



さあ出発

森ではまずイタヤカエデ、次にヤマモミジの冬芽を観察。飲み込み悪い私は実物を目の前にしても主枝と側枝との区別できずリーダーを手こずらせました。「枝が紅い、先端がブタの足=ヤマモミジ」間違っていないですか？あと、希少なヨコワサル



ヨコワサルオガセ



イワガラミ

オガセ、その「横輪」を視認できたのでこれはしばらく忘れません。ツルアジサイとイワガラミも、今このレポを書きながら復習しました。装飾花(罌)が3～4枚はツルアジサイ、1枚はイワガラミで低いところが好き、つまり岩に絡みつくんですね？私は登山が日常ですが、違いを意識していなかつ

たと思います。観察のポイントが分かって楽しみが増えました。



このブナは株立ちでしょうか

カエデの枝の付き方は

少し登りが急になってきました

それにしても美しいブナたち、高森川にそって少しづつ標高をあげながら、樹齢を推測し「この木は同世代」とか「このブナは樹勢が弱い、負け組かあ、気持ちわかる」とかとか…。いつものように楽しく歩くうちに、いつしか空は曇り、やがて雪が降ってきました。目的のサワラまでは諦め、今回の観察会の目玉(?)「雪の層を観察し硬さを計る」に移行します。まず役員さんが持ってきてくれたスコップで、雪が層として観察できるまで掘ります。2mくらい交代で掘り下げましたが、なかなか大変でした。地面に届くまでは無理そう…。



雪の断面

そこで雪の壁に墨汁のスプレーをかけると…うわあ、ほんとにくっきりと新雪、しまり雪、霜ざらめ雪、ざらめ雪(「観察会のしおり」に詳しく掲載)の層が表れました。守さんがそれぞれの層を、手のひら、拳、4本指、一本指で押し込み、雪の硬さを我々に目で見えるように示してくれました。参加者は自分で掘った体験も合わせて、雪崩の時の雪の量とか重さ、身体にかかる圧力を想像し、雪山の事故の恐ろしさを実感できました。雪山にも登る自分にとっても貴重な学習だった



もっと掘って

と思います。やはり机上の知識とフィールドで体感することは全然ちがいますね。ほかのみなさんも、雪下ろし作業の事故のこととか、話題にしていました。穴を埋め戻し、帰路には顔が痛くなるほどの吹雪となり、雪山の厳しさを、身をもって体感、もちろんみな

無事に降りてきました。

解散のあと、Aさん、Hさんとラーメン屋へ行き、熱々の野菜ラーメンで身体を温めたのですが、そのとき、Hさんが「スノーシュー楽しかったあ、あんな楽しい道具があるんですねえ」とニコニコ笑顔、私も初めて雪の山を歩いた



吹雪になりました

日の感動を思い出しました。後半は吹雪体験の観察会になりましたが、今回も楽しかったです。企画、下見、スノーシューの手配、会計、パンフ作り、などなどたくさんの準備をしてくれた役員さんに感謝です

それにしてもパンフレットの「180回観察会」の文字！！会のHPには1999年の第39回観察会からの記録がありました。1回目はいつだったのでしょ、どんな内容だったのでしょ。このレベルと内容の観察会を20年以上途切れさせることなく継続してきた…。高山の会の素晴らしさに驚くばかりです。これからもよろしく願います。

スプリングエフェメラルは春の儂いもの、早春季植物と言われる。雪解けの山野の日だまりに一面に咲き始め、次々と我先にと咲いてきます。木漏れ日が差しキラキラしていました。

アズマイチゲ

(東一華)

最初、東日本で発見され、花が一つで一華とつけられたとの事です。その後に一花とも言われるようになったとか!! 花がつぼみの時は、少し赤色を帯びて、葉が垂れ下がっています。白い花びらはガク。



キクザキイチゲ

(菊咲一華)

花びらが菊のような形で咲いていて、葉も菊の葉に似る。花は一つで一華。キクザキイチゲはキク科ではなく、キンポウゲ科である。キク科のように花びらの下には、緑色のガクはない。アズマイチゲと同じく花びらはガクにあたる。アズマイチゲより少し遅れて咲き始める。花びらの色が白と紫の株がある。



キバナノアマナ

(黄花の甘菜)

黄色い花を数個咲かせ、甘い葉っぱを付けるので、甘菜と言われる。白い花のアマナもあり、昔から食されていたようだ。花は黄色で小さく、星のように見え可愛い。



ニリンソウ

(二輪草)

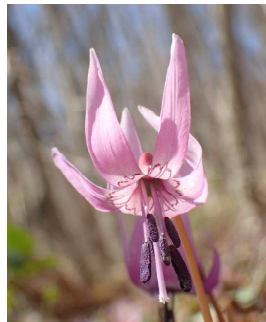
アズマイチゲ、キクザキイチゲと同じく、キンポウゲ科である。白い花を二輪咲かせる。花びらは5枚だが、ガクである。その花びらの裏も紅色になり、アズマイチゲに似る。葉はキクザキイチゲに似る。株が何本も集まり、花籠のように見える。



カタクリ

(片栗、片籠)

花が咲かない葉に、鹿の子模様がはっきりと現れることから(かたかご)と言われ、その後カタクリとなった。また、重そうに垂れるカタクリの実が栗の実に似ることから、片栗という説がある。花、茎、根で片栗粉を作ったところ少量しか出来なかったとか。



スハマソウ

(洲浜草)

花は白く小さく5枚。弧状になった砂浜を(洲浜)と言われ、丸い葉のタイプを洲浜草と言われる。葉が尖ったタイプの花は、ミスミソウ(三角草)と言われ、花の色は何色にも咲き分ける。これらは、雪解けに咲くことから、雪割草とも言われる。ミスミソウは高山、スハマソウは低山で育つ。



身体のものさし8 ～時を刻まなくなった場所～ 土井 昇

呼吸を様々な視点で検討してみたい。

ふつう身体の各部分は、骨の上でさえ呼吸を感じるものである。しかし、怪我はともかく、目に見えない形で意外な所に呼吸していない部位を見出すことがある。生きてくる中でヒトは何度も打撲を受けるが、自然治癒のキャパシティを超えてしまえば、衝撃が残存する。そこが可視化されて判明すれば対処もできるが、こうした場所は概して沈黙するものなのだ。

手の腱鞘炎と腰痛で来た人は何度もムチ打ちをやっている首も回りにくいと訴える。第六胸椎の右にちょっとしたへこみがあり、指を当ててみると肩甲骨と骨盤の位置や動きが整ってくる。圧を少し加えると「何ですか、そこ？」と言う。変な痛みがあり、息がしづらくなるらしい。力を抜いて触れていると、周りよりも冷たいし、呼吸もしていない。しかも奥に堅いしこりを感じた。持久戦を覚悟して、ただ指を触れて相手の呼吸に合わせていた。しばらくしてから中にあるしこりの周りが少し弛みだしたら「気持ちいい～」と言う。その後からしこりが渦を巻くようにゆっくり動き始め、柔らかくなってくると、そこが脈打ってきた。そのまましばらくしてから、全身の大きな呼吸の流れに同調し、溶け合ってしまった。

衝撃を受けた時、危険を感じた所は、表層の力のない分、深い所で頑張ってしまう。急激な収縮後も表層の弱点が補われないため、硬化したまま弾力を失い、沈黙したのだろう。身体は呼息で弛み、呼息で縮まる。この繰り返しが秒針の如く、時を進める。呼吸を失えば時が刻めなくなり、止まってしまう。弛む「時」も縮まる「時」も立ち上がることはない。その箇所が全身との共働作業から離脱し、そのため他所が代償を引き受けた症例だ。

第六胸椎から板状の筋が上部に伸びて、肩甲骨内上方から後頭部に伸びていく板状の筋と協力して、頭部と頸部を支え、動かしている。まさに、ムチウチ症の標的筋の付着部なのである。長い間、放置されたため、負荷は手や腰へと波及して、慢性化への道を辿っていたのだ。

首はすぐ回るようになったが、負荷がかかり続けた場所は、呼吸が小さくなっており、回復には期間を要した。リセットしても、習慣の力で引き戻されることも多い。しかし、そこに手を当てながら、怪我の時やそれに耐えて行動してきたこと、そこからずっと生きてきたことに思いをはせてみよう。諦めずに続けていくうちに少しの変化が訪れる。そこに呼吸が戻り始めるのだ。その時は、自分を支え続けてくれた場所を掌で包み、その呼吸を感じながら、一緒に深い息をしてみたいのである。



時を刻まなくなった場所



山のエッセイ 11

声なき会話（磐梯山の山上にて）

長岡義人

関東周辺に住む山好き達は何処の山に行くにも便利だ。例えば春夏秋冬シーズン中の名峰に登りたくなったら、週末に東京のバスターミナルに行けばよい、そこからは深夜バスが各地の高名な山の登山口まで運んでくれる。日帰り可能な山なら麓の宿に前泊又は後泊しなくても登ってこられるという。神奈川県に住む次男坊がリュックを背負い登山靴を履いて帰宅した。昨日山形の月山に登ってきたそうだ。東京から月山行きの夜行バスで早朝山麓の登山口に到着して月山に登り、下山後またその日の月山発東京行の深夜バスで東京に戻って、今度は新幹線に乗って福島まで来たという。そして明日一緒に磐梯山に登ろうと言った。「ダメだ、俺の体力では無理、とても自信がない」と言う。「ダメだったら途中で下りてくればいいじゃないか」と誘惑する。私は会津磐梯山にいつか登りたいものだとずうっと憧れていたが、登山経験者皆が口を揃えてあの山はきついいと言い、その言葉に私はいつも怖気づいてしまっていた。だが息子に誘われると奴と一緒にならもしかすると登れるかもしれない、ダメな時はダメだと甘えられるなど欲をだしてしまった。

そうして出かけた磐梯山は本当にきつく、自分には急登をただただ登るだけの険しい山だと痛感させられたのだが、本当はたった少しの山登りなのに、私はすっかり疲れてしまった。途中すれ違う人たちが哀れな私の姿を見て、もう少しですよ、あとチョットですよと励ましてくれるのだが、登っても登っても次の急登が現れる。そしてついにダウン。そんな私の様子を見て息子が「ここでもう下りよう」言ってくれた。だがそれではここまで私に付き合っ一緒に登ってくれた息子に悪い、てっぺんに立たせてやりたい。「俺はここにいるからお前が頂上まで登って、あとどの位で頂上だか調べてきてくれ、俺にも登れそうなら頑張るし、無理ならお前の言うようにこのまま下りる」と言うと、分かったと言って彼は頂上へ走るようにして登って行った。そして結果今度は本当にもう少しだと分かり荷物を全部息子に背負ってもらい、空身になった私はやっとのことで頂上にたどり着くことができた。苦しかったその分気分は最高、心は達成感でいっぱいになった。山上の岩に腰かけ、頂上を渡る爽やかな優しい風に吹かれながら、朝妻が持たせてくれた握り飯を二人して食した後、背負ってもらった私のザックからパイナップルの缶詰を取り出し、割りばしで一切れずつ交代々々に食べた。そして最後に残ったシロップは感謝のお礼として次男坊に譲ることにした。このように私はいつも山頂で果物の缶詰を開ける。

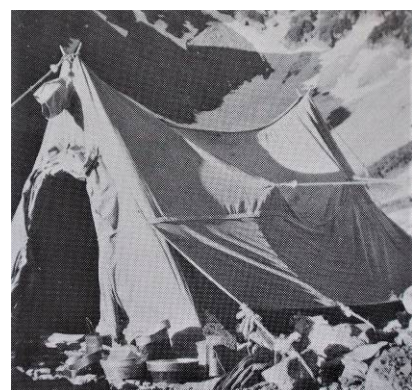


よれよれの登山者



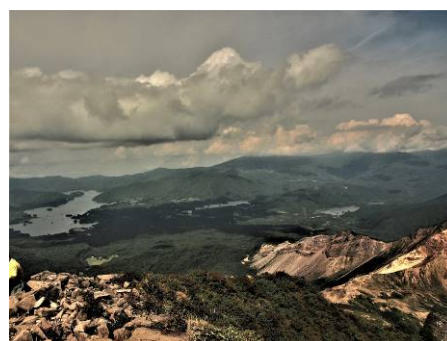
荷物を前後にふたつ抱えた登山者

高校の山岳部時代、合宿最後の晩の明日は里に下りられるという日の夕食後、テントの中のローソクの灯りの下で、ザックの一番底に入れて運んできた粉末ジュースを水に溶かし乾杯した後、それぞれ各人が持ち寄った菓子などを食べながら、歌ったり語ったりして恒例のコンパ(晩餐会)を開催するのだが、ある時OB(先輩)が果物の缶詰をザックの底から引っ張り出し皆に振舞ってくれた。あの時のそれがとても贅沢で幸せな気持ちになれたことの思い出が懐かしく、果物の缶詰は私の個人山行でのルーティンとなっていた。次男坊は「俺もこの頃山に缶詰を持っていくようになった」とボソツと言ってニヤツと笑ってから、続けて「俺も高校生の頃から山に目覚めていたらよかった」と聞き取れないくらいの小さな声で呟いた。私はその言葉には反応しないで「俺はもうそろそろ卒業だな」と独り言のように言い、続けて口には出さず心の中で「お前はこれからいろいろな山に行けるじゃないか、いろいろなことやれるじゃないか、振り返るのはまだ早い！」と声をかけた。それは磐梯山山頂での、父と息子の声なき会話だった。



テント

眼下には大きな猪苗代湖が陽光にキラキラと輝き、振り返れば裏磐梯の檜原湖、小野川湖、秋元湖や五色沼の湖沼群が森の中から顔をのぞかせていて、帽子のひさしをチョット上げて眺めると、隣の安達太良連峰と吾妻連峰、遠くには飯豊の山々が、稜線に雪を載せて光っていた。私はやっと次男坊のお陰で長年の夢だった磐梯山の頂に立つことができた。



磐梯山山頂からの眺望

「さあ下りよう」缶詰とおにぎりが無くなり軽くなったザックを背負った私はそう言うと、息子の後にくっついてまた歩きはじめた。

東北ブナ紀行（80）

奥田 博

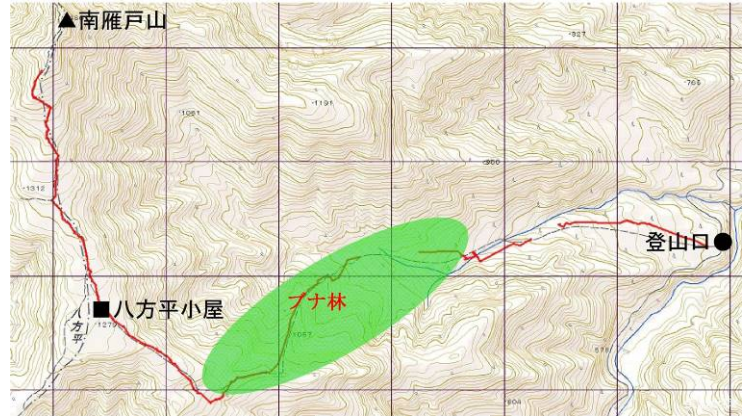
宮城県の本ナ紀行に戻ります。宮城県で本ナ林の量質共に圧倒的なのは蔵王連峰だろう。北の雁戸山から南の不忘山まで良質な本ナ林が広がっていた。今は、中腹にわずかに散見されるのみだ。回数の番号がダブっていたので、今回一番飛ばしての附番になります。

125) 南雁戸山 1486m

雁戸山は遠くから見ると、尖ったピークを空に向けて目立つ存在だ。尖がっているが北にある雁戸山と呼ばれる方が、南雁戸山の方が2m高い。地図上は北の雁戸山の方に名前が付く。南雁戸山の本ナは、ブドウ沢林道終点から歩き始め八方平避難小屋の尾根に上がる手前までの間に本ナ林が広がっている。

登山口からはブドウ沢に沿って登るが、既に本ナ帯。2回の渡渉を経ると、次第に立派な本ナが多くなる。高度を上げるとクロベ林も目立つようになる。高度を上げ最後になぜか本ナ二次林が現れ、八方平避難小屋に到着した。

コースタイム：林道終点（30分）ブドウ沢渡渉（2時間）八方平小屋（45分）山頂（2時間30分）登山口

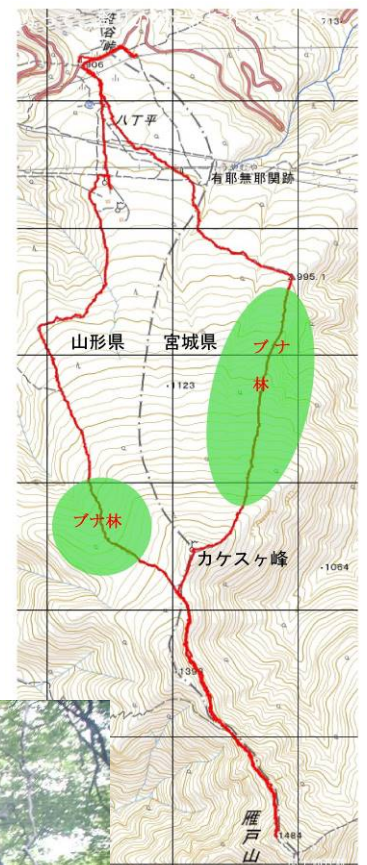


126) 雁戸山 1484m

北側の笹谷峠から登るコースは、人気がある。登りに山形県側を歩き、宮城県側を下った方が歩きやすいように思った。笹谷峠付近は笹原や灌木帯が続き、人工物も加わって樹林帯は標高1100mを越えてから現れる。本ナの見どころは、森林限界の1250mまでなので、本当に短い。山形側は偏西風の影響だろうか、太い本ナは少ない。道もえぐられている箇所が多く、歩きにくい。

帰路は途中から宮城県側を下った。カケスケ峰を越えると、灌木帯を経て本ナ林へと入っていく。素晴らしい本ナが現れ、足を止めることシバシバ。我々登山者は、登山道周辺を眺めやる範囲の本ナを觀賞するしかない。従って冬山以外では、登山道から視界の範囲で「見事な本ナ」や「楽しい本ナ」や「輝く本ナ」などを探ることになる。我々の目に触れない本ナの方が、遥かに多いはずだ。

コースタイム：笹谷峠登山口（2時間）新山分岐（1時間）山頂（1時間）関沢分岐（2時間）笹谷峠登山口



霧に包まれた本ナの木も魅力的（左 雁戸山）



上部に登っても太い本ナが見られた（右 南雁戸山）

リュウキンカ (*Caltha palustris* var. *nipponica* キンポウゲ科リュウキンカ属)

吾妻・安達太良連峰の中腹の湿性に植生する常緑多年草。年間を通して根生葉を出し続け常緑性を保っている。リュウキンカ・ミズバショウ群集と呼ばれる湿生植物群の構成植物としてミズバショウとともに植生することが多いが、山麓の沢沿いに滞水した一角に単独で群落を形成することもあり、ミズバショウとは必ずしも植生地は重ならない。似た植物に変種エンコウソウ (*C. palustris* L. var. *enkoso*) とエゾリュウキンカ (*C. fistulosa*) があるが、吾妻・安達太良山域には植生しない。また、山麓の畑地等では繁殖力の旺盛な外来種ヒメリュウキンカ (オウシュウキンポウゲ *Ranunculus ficaria*) が確認されているが、こちらは湿地帯には自生しない。

葉は互生。根生葉は大きく、花茎に着く茎葉はそれより小さい。葉柄は中空で断面は馬蹄形、エゾリュウキンカの断面は円形である。葉身の形は馬蹄形で茎葉の基部は茎を囲む。葉縁には浅い大型の鋸歯があり、その先端に緑白の腺点が着く。

花は頂生。花茎の先端に1, 2輪黄色い花を着生する。花弁はなく、花弁状の黄色いがく片を5~7枚着ける。雌しべも5~7個でがく片と同様に変化が多い。なお、エゾリュウキンカの雌しべは15個以上でリュウキンカよりかなり多い。雌しべの周りに多数の雄しべが着生する。蕾はがく片が閉じた状態であり、緑を呈している。蕾が開くと黄色い内側が姿を現す。その周辺は、開花してしばらくは緑色の痕跡が残っている。雄しべは花糸、葯ともに濃い黄色、雌しべは緑色の花柱の上に黄色みを帯びた柱頭が外側にくびれる。

リュウキンカは初夏に西吾妻中腹に散在する湿原でよく見かけており、時期的には春の花のイメージはなかった。スマレの花を求めて吾妻山麓のコナラ林を散策していると、周辺の樹木の芽吹きもまだ早い時期に落葉で覆われた林床のわずかな水の流れにぽっかりと緑のオアシスが現れた。そこに近づくと見事なリュウキンカの黄色い花が咲き誇っていた。リュウキンカは春の花と認識した次第である。



カジカエデ (*Acer diabolicum* ムクロジ科カエデ属)

吾妻・安達太良連峰の主に中通り側のブナ林下部からミズナラ・ケヤキ林に植生する落葉高木。日本固有種。オオモミジと同様に主として太平洋側に分布する。そのため、吾妻連峰は会津側と分布の分水嶺となっている。カエデ類は雄花と両性花を持つものが多いが、カジカエデは雌雄異株で雄株と雌株がある。雌雄異株のカエデには他にウリハダカエデがある。

葉は対生。葉形はほぼ五角形でカナダ国旗のサトウカエデに似ている。掌状に5裂し、上部の3裂片が大きい。基部は切形~浅い心臟形で、基部から5本の掌状脈が出る。裂片には2~3個の欠刻状のきょ歯があり、縁には短毛が密生する。葉の表面は緑色、裏面と葉柄は淡緑色。両面に短毛がある。

花は腋生。葉が開く前に開花する。葉を伴わない対生の腋芽から枝を挟んで多くの散房花序が垂れ下がるため、樹木一面に花を付けた様は圧巻である。花序当たりの花数は雌花より雄花の方が多く、雄株の方が花は賑やかである。カエデの花弁とがく片はともに5枚が基本。雄しべは8本が基本であるが、カジカエデの雄花は花弁とがく片が合着し、釣鐘状の花被筒となる。花被筒の外に黄色い葯が突き出ている。雌花は花弁とがく片は合着しない。花心部から2本の桃色を呈した柱頭を湾曲しながら突き出す。花弁とがく片の色はオレンジ色がかった赤色で日差しを浴びると他のカエデには無い煌びやかさである。

春真っ盛り森を歩いていると、黄色や深紅の花を纏ったイタヤカエデやハウチワカエデを良く目にする。それに比較してカジカエデに出会うことは稀だ。目前の満艦飾の大木の姿は一種独特の異様な雰囲気漂い、思わず言葉を飲みこんでしまうほどの迫力がある。



第181回自然観察会案内：早坂山 スプリングエフェメラル観察会

日時：2022年4月17日（日）8：00～15：30

集合場所 四季の里正面入り口（あづま橋側）

集合時間 8:00 参加定員 20名

内容 米沢市近郊の早坂山のミズナラ林を散策し、林床に咲く、早春の花々を観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代(500円)、申し込み：4月15日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

第182回自然観察会案内：野手上山シロヤシオの森観察会

日時：2022年5月15日（日）8：00～15：30

集合場所 小鳥の森第一駐車場

集合時間 8:00(小鳥の森第一駐車場) 参加定員 20名

内容 野手上山城のハイキングコースを散策し、初夏の新緑と花々を観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋(軍手複数)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代(500円)、申し込み：5月13日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

西吾妻登山道誘導ロープ設置ボランティア(詳細は佐藤守まで)

ロープ設置作業の一般公募を継続します。公募は天元台側とデコ平側に分けて募集します。

1. 実施日：西大巔鞍部は平日、西吾妻小屋側は週末に実施します。

作業山域：西大巔鞍部

2022年6月14日(火)6時30分～16時00分(雨天時6月15日(水)に順延)

作業山域：天元台－西吾妻小屋(NF米沢と共同で実施します)

2022年6月18日(土)6時30分～16時00分(雨天時6月19日(日)に順延)

天元台湯本駅からのロープウェイ・リフト代(往復3800円)は自己負担になります

2. 定員：10名程度(山岳での行動において自己管理のできる方)

3. 内容：各山域の登山道誘導ロープの設置作業を行います。

4. 集合場所：四季の里交差点正面入口駐車場6時30分または事前連絡により15日はグランデコススキー場駐車場8時00分、19日は天元台湯元駅7時30分

5. 申し込み：6月11日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

新型コロナウイルス感染を避けるため観察会、ボランティアに参加される方は以下の点に留意してください。

- ・ 自宅を出る前に検温をお願いします。
- ・ 体調の悪い場合は、無理しないでキャンセルの連絡をください。
- ・ マスクをご持参願います。

振込による会費の納入は、郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第120号 2022年4月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP:<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時～9時)

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(1000円)を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田